

と土地との關係、農夫工匠奴隸の立場を説く、第三部に於て、第四王朝に於ける王と、王の崇拜を見る。これより著者の筆致は次第に精緻を加へ、國家、並にこれが監理等に互る。その註釋的解説も大に示唆に富む。殊に許多なる職名にも注意を拂ひ、大臣の職能を仔細に説く、これによる政治形態の變化を檢すると共に、第三王朝と比較して私人の生活にもその論證を試みて居る。

第二卷に入りて、第五王朝をとくが、第四部に、王と、王の崇拜を觀、茲に大なる變化を見せる所は、從來とて多くの埃及學者によつて指摘されるが、著者は内廷内の模様より、貴族、世襲特權階級の存在を明にする。就中、大臣について詳細説いて餘さざるの感がある。やがて、一轉して、納税、裁判等、民衆との交渉を有する方面に及び、これが、次第に行政にも變化を與へるを示す、斯くて、公法につきて説き、第五王朝より、第八王朝に互つて敘して居る。第五部にては私法を取扱ひ、契約書、家族について説く、殊に後者について第三王朝より、第六王朝までの變遷を比較して居るのは注意すべきである。

第三卷は(一)と(二)とに分冊されるが、第六部として、概して第六王朝をとき、王朝末、地方豪族割據の狀勢を醸すに至るを示すと共に、その内容を檢討し、民衆にとりての家族、相續につき詳説する。

以上は極めて、概括的に紹介したるにすぎない。寧ろ筆者の讀後感の一端を述べた程度と云ふのが應しいとも思はれる。而してその所論に於て充分堅實なる態度をとり、資料不足の個所につい

ては強いて斷定にまで、導かうとはしない。特に地方行政と私人に對する法制については然か感ぜられる。再讀三讀して滋味を求むべき書と信する。(岡島誠太郎)

希臘美の性格

村田數之亮著

謂ふ處の新體制とは、一體如何なる事を言ふのであらうか。所謂新體制なるものは、國家總力戰の爲の強靱にして強力なる組織なるかの如くであり、苟も一個人の祖國を遊離した存在と行爲を許さぬ處のものである。

處で斯る新體制に歴史學徒が積極的に獻身協力すると謂ふ事は具體的には如何なる形を執る事なのであらうか。

吾々が、凡そ歴史の名稱を冠せられつゝあるものへの記憶を新にする時、曰く政治史、曰く經濟史、曰く社會史、曰く文化史等々と餘りにも歴史研究が細別せられ、而も其等が各々獨立性を固守し獨自性を主張して一見、其等は各々獨立せる科學たり得るかの觀を呈せるに驚かないであらうか。

然し乍ら、人類は決して單に政治的な人間のみでもあり得なかつたし、經濟生活をのみ營める者ではなかつた。人間生活の營み、文化の創造と發展への努力の跡即ち歴史は、同時に政治的であり經濟的であり、社會的であり文化的等々であり、而も其等は渾然たる一つの有機體の中に織り込まれ營まれ來つたのである。吾々には従つて、歴史を離れた特殊史はない筈である。

新體制に協力するとは、吾々が直ちに歴史研究を放棄して政治家になれ、社會運動家になれと謂ふ事ではない。吾々に課せられたる使命の一つは、確に、從來主張せられつゝあつた特殊史の存在理由を檢討し、特殊史を歴史の中に引戻し、歴史の中に新しく體系付ける事でないならぬ。特殊史を特殊史の内に限定せずして歴史の領域に迄昂め、歴史を常に背景として究明する事ではなくればならない。特殊史は個であり、歴史は普遍である。個と普遍を綜合する事に依て、却つて特殊史の正しき把握と理解が得られるのである。是は素より歴史の有つ本性ではあるが、新體制樹立の緊要を叫ばれつゝある時、斯る反省が特に此際必要と考へられる。

美術史研究は從來鎖國主義に墮し耽美主義に陥れるもの、尤なるものであつた。彫刻の、繪畫の、建築の様式手法の變遷推移を説く事は好んでなされはしたものの、其をよりよく廣き歴史の立場より、或は時代を常に背景として理解せんとする傾向は、決して顯著であつたとは謂へない。今茲に著はされたる村田氏の「希臘美の性格」は、何よりも先づ、美術史の正しき立場を示唆するものとして注目せらる可き著述である。

概念規定へのルーズさは歴史研究を著しく阻害し混亂に至らしめてゐるとは、短き私の學究生活中の印象である。資本主義なる概念濫用が、或は資本主義と資本主義的との混用が、如何に近世理解を困難ならしめ、又眼前に慌しくも展開せられつゝある世界史の動向への正しき認識を曖昧ならしめてゐるかは、近世史研究

者の等しく痛感する處であるが、同様の事は他の何れの時代に就ても謂ひ得る事であらう。

素より其は、歴史研究のアルファでありオメガであつて、決して容易に到達結論せらる可き處のものではない。然し乍ら私は、斯る概念規定への眞摯にして尊き努力の跡を、此書に於て見るの喜びを有する者である。此のクラッシック把握への峻嚴なる態度は、多く吾々の學ぶ處でなければならぬ筈である。

僅一日の暇を見出しては訪れた古き寺々の有つ古今に卓越せる藝術への印象が、歸宅早々は生の儘の印象として、或は形像色調への可成り正しき記憶の儘に、又幾月幾歳を経てからは昇華して愈々淨化せられた全體美への想出として、或は特に深く腦裡に刻まれた部分への一層強き愛着として、夫々樂しき懷想となり、若し拙き筆にても何時の日か之を記すならば古美術巡禮者には殊に訴ふる處多からう事は容易に想像せられる處である。

況んや三年に近く希臘の美を求めて歐洲に留學せられ、而も其間幾多の不便にも不拘、兩三度に互つてヘラスの地を訪れ、愈々詳しく益々深く希臘藝術を洞察せられて歸朝、間もなく稿を起された著者の希臘美探究の爲の名筆が、堪え難き異郷の旅への懐しき懷出を行間に漂はせつゝ、如何に自信に満ちて鋭くなされてゐるかは謂ふ迄もなからう。本書は飽迄、希臘美の本質と精神とを尋ねんとする香り高き學術者ではあるが、而も尙讀者をして希臘の旅への強き憧れに誘はんとするもの、あるのは、本書が文獻に基く單なる研究ではなく、希臘美を親しく身を以て體得共感せられ

た著者の研究であるからであらう。

本書の優れたる特色とさる可き點を若干擧げたのみなる右の私の紹介は、唯單なる讀書感と謂ふ可きものかも知れない。然し乍ら、前二者が特に本書の生命とも謂ふ可きものであらう事は、私の確く信じて疑はざる處である。其が具體的に如何に理解々明せられてゐるかは、一に讀者の精讀と批判に俟つ可きものであつて、凡そ希臘史に縁遠き私の到底云々出来る筈のものではない。従つて、美術史を歴史的に觀ると謂ふ時の歴史的と謂ふ事に、尙今少し突進んだ究明があるのではなからうか、とかクラッシックの概念規定の嚴酷なるに對し、ロマンティックなる用語は少しく常識的に陥りはすまいか等の疑問も、唯徒らに私の無智淺學を暴露するのみであらう。

美術史を志すもの、西洋史研究の學究は素より、教養を深く且高めんとする一般文化人の一讀を薦めて已まざる者である。(教養文庫 26 弘文堂發行 定價五拾錢) (西井克己)

CHRISTOPHER DAWSON: THE MAKING OF EUROPE. An Introduction to the History of European Unity, 400-1000 A. D. (London, 1933)

その新刊の故にはなく、その新視の故にこの書は紹介さるべきであらう。著者・ドウソンは既に文明・社會批評家として、又所謂 Medievalist として、その強きカトリック信仰を共通にする一

の思想家達、例へば T. S. Eliot, M. C. D'Arcy, J. Maritain, Z. Barzdaev 等々と共に我國にも知られてゐる人である。これらの人々は「中世から近代への轉換をいはばノルマルからアブノルマルへの移行」(ペンテイ)として、又その宗教性 (religiosity) を喪失して世俗化 (secularisation) したところに近代の、そして現代の文明の最も大いなる缺陷があると考へる。近代ヒュマニズムは彼等によれば「中世フランス人間ではなく、むしろ中世マイナス神」(ジルソン)なのであつた、従つて何よりも先づ眞の宗教性、即カトリック信仰を恢復することこそ、現代の危機を克服し、解體しつゝあるヨオロッパを救済する道なのである。ドウソンは最近の著「宗教と近代國家」(Religion and the Modern State, 1935)の中でこのことを明確に述べてゐる。

然し我々がこゝで取上るドウソンは、文明批評家或は宗教的評論家としての彼ではなく、歴史家としてのドウソンである。勿論歴史家ドウソンと文明批評家ドウソンとは「デューキルとハイド」の存在ではない。歴史家としてのドウソンと文明批評家としてのドウソンは互に支へ合ひ絡み合ひ、而もカトリック信仰がその中樞的紐帶となつてゐる。しかしドウソンはカトリック的史觀を我々に強制するものではない。それなればならん新らしきものではなくアウグスティヌス以來の西歐の傳統的歴史觀である。我々がこゝで特に注目するのは、ヨオロッパ史に關するその European Unity の思想である。

勿論 European Unity の思想それ自體、何等新らしいもので